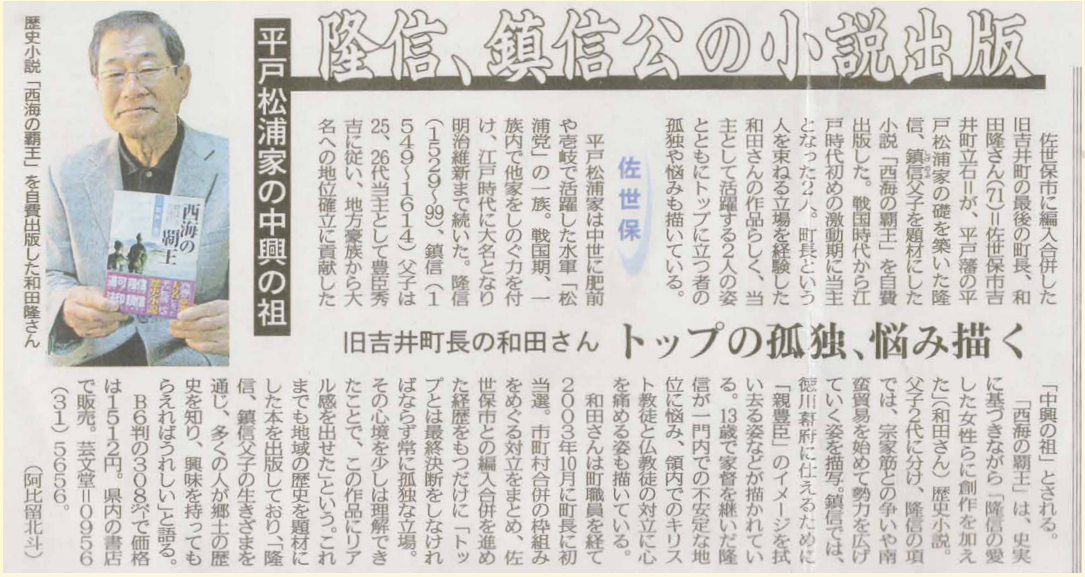
第36回 小説「西海の覇王」 佐世保文学賞を受賞



隆信、鎮信公の小説出版

平戸松浦家の中興の祖

旧吉井町長の和田さん トップの孤独、悩み描く

佐世保

佐世保市に編入合併した旧吉井町の最後の町長、和田隆さん(71)＝佐世保市吉井町立石＝が、平戸藩の平戸松浦家の礎を築いた隆信、鎮信父子を題材にした小説「西海の覇王」を自費出版した。戦国時代から江戸時代初めの激動期に当主となった2人。町長という人を束ねる立場を経験した和田さんの作品らしく、当主として活躍する2人の姿とともにトップに立つ者の孤独や悩みも描いている。

平戸松浦家は中世に肥前や壱岐で活躍した水軍「松浦党」の一族。戦国期、一族内で他家をしのぐ力を付け、江戸時代に大名となり明治維新まで続いた。隆信（1529～99）、鎮信（1549～1614）父子は25、26代当主として豊臣秀吉に従い、地方豪族から大名への地位確立に貢献した「中興の祖」とされる。

「西海の覇王」は、史実に基づきながら「隆信の愛した女性らに創作を加えた」（和田さん）歴史小説。父子2代に分け、隆信の項では、宗家筑前との争いや南蛮貿易を始めて勢力を広げていく姿を描写。鎮信では、徳川幕府に仕えるために「親豊臣」のイメージを拭い去る姿などが描かれている。13歳で家督を継いだ隆信が一門内での不安定な地位に悩み、領内でのキリスト教徒と仏教徒の対立に心を痛める姿も描いている。

和田さんは町職員を経て2003年10月に町長に初当選。市町村合併の枠組みをめぐる対立をまとめ、佐世保市との編入合併を進めた経歴をもつだけに「トップとは最終決断をしなければならず常に孤独な立場。その心境を少しは理解できたことで、この作品にリアル感を出せた」という。これまでも地域の歴史を題材にした本を出版しており、「隆信、鎮信父子の生きざまを通じ、多くの人が郷土の歴史を知り、興味を持ってもらえればうれしい」と語る。

B6判の308ページで価格は1512円。県内の書店で販売。芸文堂＝0956（31）5656。

（阿比留北斗）

歴史小説「西海の覇王」を自費出版した和田隆さん

この度、和田隆さん著書「西海の覇王」が佐世保文学賞を受賞され、その祝賀会にお招き頂き、行ってまいりました。

今回、ご縁があってカバーの絵を描かせて頂くことになり、私はいち早く小説を読ませてもらうことが出来ました。本の内容等は上の記事でも紹介されているので割愛しますが、私にとって印象的なシーンがありました。それは隆信が川内峠を訪れるシーンです。そのシーンは二度あり、一度目は隆信が当主になったばかりの頃に重臣と訪れた時、二度目は鎮信に当主を譲った直後に親子で訪れた時です。今回の表紙カバーは二度目に訪れた時の場面を描きました。南の地平線を見据える若き当主を後ろで見守る父であり先代当主でもある隆信。この二人の後ろ姿はまさにこの小説を象徴するものだと思い、現地に行き描かせてもらいました。

とにかく肥前の戦国史が好きな私にとってはまさに欲しかった一冊です。小説ですが、史実をもとに描かれており、もちろん争乱の世を生きた親子の苦悩と人間模様が第一の魅力ですが、読むことで肥前の戦国史を分かりやすく知ることも出来ます。西の端の外様といえど、その歴史はスケールが大きく、ダイナミックなもので、いつの日か小説を元にした映画やドラマを目にする日が来るかもしれません。

和田さんとの会話の中で、次回作の案を少し聞かせてもらいました。和田さんの頭の中ではまだまだ書きたいものが溢れ出ているようで、次回作にも大いに期待したいと思います。

最後に今回お招き頂いた吉井エコツーリズムの皆様、本当にありがとうございました。

道可隆信・法印鎮信

西海の覇王

著者 和田 隆

戦国時代、西海の豪族から大名になった
平戸松浦家の二十五代当主道可隆信と
二十六代当主法印鎮信。
その父子には、敵対する宗家松浦や大村
純忠との熾烈な抗争、南蛮貿易やキリ
スト教をめぐる領内の相克、父子の葛藤
など多くの苦悩があった。
過酷な時代を生き抜いて大名となった
戦国武将父子。それを支える人々の献身
と悲哀を描いた歴史小説。

B6判／308ページ／並製本

定価 1,400円（税抜）

ISBN978-4-902863-64-2

発行所　芸文堂

お求めは書店または芸文堂へ

佐世保市山祇町19-13 TEL 0956-31-5656